

〈論文〉

## 「静観的」登山の系譜 ——大島亮吉によるエミール・ジャヴェルの受容についての試論——

田 中 恒 寿

### はじめに

1920～30年代、大正末期から昭和初期にかけて、「静観派」という山登りのある一つの態度を共有する人々が、日本の登山界において重要な勢力を形成していた。この「静観派」という名称は、確固たる定義に基づいて用いられているわけではなく、基本的には、ヨーロッパ伝来のアルピニズムを一途に追求しようとするいわゆる「登山家」に対して、叙情性や精神性に重きを置く日本の伝統的な「山旅」の系譜を受け継ぐ人々を指すが、低山を中心としたその山行の実体に鑑みて、やや蔑称的もしくは自嘲的に「低山派」と呼ばれることもあれば、山行にともなう高踏的な気分から「逍遥派」と称される場合もある。「静観派」にとって山登りは単なるスポーツではなく、芸術や歴史、民俗、地理、自然科学をも包含する文化的な営みである。深田久弥の『日本百名山』（1964年）は、「静観派」を現代に受け継いだ代表的な成果であると言えるだろう。

ところで、この静観派全盛の時代にあって、大島亮吉（1899～1928年）は「静観的」という言葉をきわめて特殊な意味で使っていた。大島亮吉は、榎有恒らを中心にして1915年に設立された慶応義塾山岳会の有力なメンバーの一人として、日本の近代アルピニズムの黎明期に活躍した登山家である。彼は、1924年の奥穂高・前穂高岳積雪期初登頂など尖鋭的な登山活動を行なう一方で、高原や峠をめぐり歩く漂泊の趣味をもあわせ持っていた。また、大島の登山思想を受け継いだ伊藤秀五郎<sup>1)</sup>も、同じく「静観的」という言葉を、当時の一般的な「静観派」の登山態度とは異なる意味を込めて用いようとした——以降、本論中で「静観派」と言ったときには一般的な意味を、「静観的」と言ったときには、大島や伊藤による特殊な意味を表わすものとする——。この二人が唱える「静観的」登山とは、結論からいえば、いわゆる「静観派」の特徴である豊かな内面性をもって自然を観照するという態度を維持しながら、なおかつ本場アルプスにおいてアルバート・フレデリック・マ

マリー<sup>2)</sup>が提唱した戦闘的アルピニズムを継承した激しい登山行為を実践しようとする、きわめて野心的な登山スタイルであった。しかしながら、言うまでもなくこのような「静観的」登山を実行に移すのはそれほど容易なことではない。二人の主張は、後の時代にまで大きな潮流として勢いを保ち続けることができなかったようだ。

そもそも大島亮吉が前述の「静観的」登山を構想するに至った出発点には、A・F・ママリーはもちろんのこととして、さらにもう一人、エミール・ジャヴェル（1847～83年）というフランス生まれの登山家がいることを忘れてはならない。ジャヴェルは1876年にモン・ブラン山群のトゥール・ノワール（3,837メートル）に初登頂したことで登山史上に名を残すが、激しい登攀への情熱を抱き続けると同時に、アルプスの山麓を逍遙することを好み、思索性の強い文章で山を描いた文人登山家としても知られている。彼の『一登山家の思い出』（1886年、死後出版）は、山の本の古典として、特に登山の精神性に強い関心を持つ人々の多い日本ではきわめて親しみ深い著作である。

ところで、ジャヴェルの登山哲学が日本に紹介され、たくさんの人に知られるようになるまでには、大きく分けて二つの段階がある。第一の段階は、1924～27年頃の大島亮吉の諸作品にちりばめられた紹介文や引用文を通じてのもの。第二の段階は、1937年の尾崎喜八による『一登山家の思い出』の翻訳を通じてのものだ。

年代的に見て、この二つの段階の間には、それほど大きな隔たりがあるわけではない。しかし、大島亮吉の作り出した、あるいは作り出そうとしたジャヴェル像と、尾崎喜八による、もしくは尾崎喜八の翻訳を読んで人々が抱いたジャヴェル像との間には、ある一つのズレがあり、日本の登山の歴史的な変遷の中に二つのジャヴェル像を置いてみると、そのズレが持つ意味が浮かび上がってくる。つまり大島亮吉は、日本の伝統的登山の精神を受け継いだ、いわば穏健的な「静観派」の観照性を取り入れながら、それを急進的な独自の「静観的」登山へと発展させていく過程で、ジャヴェルの登山哲学を、一つの理想的なモデルとして想定していたと考えられる。ジャヴェルのとらえ方に若干のくい違いが生じたのもおそらくそのためだろう。

このような問題意識のもとに、小論では、明治中期にヨーロッパから輸入されたアルピニズムと日本古来の伝統的登山という、日本の登山の二つの潮流と両者の交渉を概観した上で、二つの登山態度を軸とした座標空間の中に、大島亮吉が提唱した「静観的」登山を正しく位置づけることを第一の目的とする。さらに、上述のズレの持つ意味についても考察を深めていきたい。

## 第一章 日本におけるエミール・ジャヴェルの紹介と受容

### 1. 大島亮吉による紹介（1924～27年）から尾崎喜八による翻訳（1937年）まで

先鋭的な登山家であると同時に名文家でもあった大島亮吉の代表作のひとつ『山 随想』（朋文堂、1958年。1930年の岩波書店版『山 研究と随想』から雪崩やアルプスの山名についての研究が除かれたもの）は、今なお日本の山岳文学の白眉として読み継がれているが、大島は山行のかたわら、ヨーロッパの登山思想の研究にも情熱を傾けた。西洋アルピニズムのパイオニアたちの列伝とも言うべき『先蹤者』は、その成果を――未完成ながら――彼の死後にまとめたものだが、この分野においては先駆的な著作であり、当時の日本登山界に新進の登山思想を注入する上で相当な貢献をした。大島は、若くして遭難死したことがつくづく惜しまれる、日本近代登山発展期における逸材であった。

彼が生前10年余の間に書き残した文章は、後に5巻の全集（あかね書房、1969～70年）に編まれるほど膨大なものであるが、その中である程度まとまった形でエミール・ジャヴェルに触れたものとしては、以下の4つの作品を挙げることができる。

第1に「山への想片」（1924年）。雑誌『山とスキー』38・39号に掲載されたもので、後に『山 研究と随想』（岩波書店、1930年）に収録された。『山とスキー』誌は北海道大学スキー部の有志がつくった“山とスキーの会”の機関誌であり、1921年に創刊、1930年の第100号まで続いた。執筆者、読者ともに第一線のエキスパートに支えられた、質の高い山岳雑誌であり、大島亮吉も『山とスキー』誌には精力的に投稿を続けている。その中でも「山への想片」は、大島とジャヴェルの関係を論じる上で、非常に重要な作品と言える。

第2に「記念として」（1924年）。初出は『山とスキー』42号で、ジャヴェルの『一登山家の思い出』からの抄訳が載っている。

第3に「エミール・ジャヴェルに」（1925年）。ジャヴェルに捧げて書いた詩で、同じく『山とスキー』50号に掲載された。

そして第4は「エミール・ジャヴェル伝」（1927年）。初出はやはり『山とスキー』64号で、後に「エミール・ジャヴェル」として主著『先蹤者』（梓書房、1935年）の中核を形成する小伝である。

いずれもジャヴェルという登山家の名を、おそらくは日本に初めて紹介する役割を果たしたという点で、画期的な意味をもつ作品群である。

その後約10年の月日を隔てて、尾崎喜八がジャヴェルの主著『一登山家の思い出』の翻訳を龍星閣から出版するに至る。誰でもがたやすくジャヴェルの著作に直接触れることができるようになったという意義は大きい。

## 2. 二つのジャヴェル像のズレ

日本では一般にジャヴェルがどのような登山家としてとらえられているかをまず確認しておこう。

『一登山家の思い出』の翻訳が出る2年前の1935年に、日本山岳会の創立30年記念として東京の日本橋丸善本店において山岳図書展覧会が開催された。和書33点に対して洋書182点、地図その他34点と、圧倒的に洋書を主体とする展覧会であったが、『目録』の洋書の部の解説を書いた松方三郎によると、

詩想豊かな登山家としてジャヴェルの名は余りにも有名である。愛誦すべき珠玉の文を連ねた山岳書と言え、伝語にあつては誰しも先ず本書を推すに躊躇せぬであろう。<sup>3)</sup>

という具合に、なによりジャヴェルの「詩想」すなわち叙情性に重きを置いていることがわかる。

これに対し、島田巽は日本山岳会の機関誌『山岳』1939年9月号の書評欄で尾崎喜八訳『一登山家の思い出』を取り上げ、ジャヴェルの哲学的、思索的な面を表に出す見方をしている。

いわゆる山登りのメタフィジックに関心を持つ人たちにとってはジャヴェルの本なぞは特に親しみふかいものであり、そういう方面に特に強い関心を持つ人々の多いわが国では、単なる初登攀記よりも、このように思索に満ちた本が要求されるためなのだろうと考えられる。<sup>4)</sup>

いずれにしても、ジャヴェルの登山家としての“行動”の面にはほとんど触れられていない。翻訳をした当の尾崎喜八もあとがきの中でジャヴェルをオルフォイス——オルフェウスのドイツ語名——すなわちギリシア神話の竖琴の名手になぞらえているが、これもジャヴェルの情緒的な面を高く評価していることの表れであろう。

過去の山岳文学中の孤高ジャヴェルを、私〔尾崎喜八〕は「伝導者」の代わりに、むしろ「アルプスのオルフォイス」の名で呼びたいのだ。<sup>5)</sup>

尾崎喜八はまた、「山や自然を愛する人間の中にも、その魂の状態（エタ・ダーム）に於て、こんなにも自分に近い者のいたこと（……）」<sup>6)</sup>云々と、ジャヴェルとの心情的な一致を

強調している。尾崎喜八（1892～1974 年）はそもそも高村光太郎や「白樺」派の影響を受けた詩人として出発するが、登山との関連で言うと、1928 年頃、「霧の旅会」のメンバーである河田楨の『一日二日山の旅』や『静かなる山の旅』を読んで感銘を受け、山の世界に開眼した。「霧の旅会」とは、東京府立工芸学校の教諭松井幹雄を中心として 1919 年に設立された、いわゆる「静観派」の大本山である。ヨーロッパ・アルピニズムの技術や装備が本格的に輸入され始めた時代にあって、当時ほとんど顧みられることのなかった低山趣味を提唱し、登山の大衆化に寄与すると同時に、登山知識の涵養に努め、会員たちによって優れた著作や翻訳が刊行されている。

尾崎喜八は、この「霧の旅会」の会員として、低山趣味普及の大きな原動力となった人物だ。とりわけ『旅と滞在』（1932 年）や『山の絵本』（1935 年）といった著作に顕著に見られる「高原趣味」は、山岳風景を愛でる日本人の感性の中に、新しい分野を確立したと言ってもよい。その尾崎喜八が自らのエタ・ダームとの近親性をジャヴェルの中に見いだしているという点は銘記すべきだろう。しかも、唯一尾崎喜八のみが特別なのではない。程度の差こそあれ、日本人の大多数においても同じようなことがいえるのである。尾崎喜八は、別のところで次のようにも書いている。

多くの日本の登山家たちが何をもってジャヴェルを愛して来たか、又何が故に愛する様になるだろうかというその間の消息を私はおおよそ解る気がする。なぜならばジャヴェルにあってはその山へのエモウションはいささかも特別な教養や解釈を通して日本風に換算する必要のない性質のものだからである。彼の熱烈で同時にやさしい心の動きには毫末も吾々の理解を困難ならしめるものがない。……彼の真面目な美しい心の動かし方が、ただちにそのまま吾々のものである。<sup>7)</sup>

多少の誇張はあるにしても、日本人にとってジャヴェルの「エモウション」は特別な解説を加えなくてもただちに了解もしくは共感できるというのである。

このようなジャヴェル評は、それ自体間違っただけのものではない。しかし、叙情性や感受性、あるいは思索的・瞑想的気分のみを取り上げて、エミール・ジャヴェルという登山家の全体を理解したと思ひ込むのは、さすがに性急過ぎると言わざるを得ないだろう。

それでは大島亮吉の場合はどうだろうか。彼の描くジャヴェル像は、かなりの揺れがあった一様ではない。

例えば、「記念として」の中で、大島亮吉はエミール・ジャヴェルを次のように紹介して

いる。

彼 [ジャヴェル] はいかにも穏和な、そしてコンタンブラチーフ（観想的）な態度を豊富に有った登山家でありました。<sup>8)</sup>

また、「エミール・ジャヴェルに」と題された詩の中では、同じく「コンタンブラチーフ」というフランス語を用いながら、次のように描いた。

ゴオをして「風景のうちに歩みいるひと」と言わしめた。

そのコンタンブラチーフな態度で山を登ったあなた。

孤独の友となり、寂寥の伴となって

隠棲と放浪に生涯の隠れ家を求めたあなた。<sup>9)</sup>

確かにこの「観想的」という評価は、先に見た一般的なジャヴェル像の哲学的側面と重なるものである。

しかしその一方で、「山への想片」では、登山家ジャヴェルのピーク・ハンターとしての“行動”の面に焦点を当てている。この視点は、一般的なジャヴェル像においてはほとんど看過されているという意味でも、注目すべきであろう。この作品の中で大島は、「そもそもこのピークハンティングということについての所言をなした登山家のひとりで、有名な人はフランス生まれのエミール・ジャベル（1847－1883）であろうと思います」と切り出した後で『一登山家の思い出』の一節を引用し、次のように解説を加えている。

すなわちピークハンティングの心は登山者にとっては離すべからざるものであることをジャベルは言っている（……）。<sup>10)</sup>

「山への想片」の主題や内容については、後に詳しく見ていくことにして、ここでは大島亮吉が、ジャヴェルをただ哲学者然・詩人然とした登山家としてだけではなく、つねにより高きを、より困難を目指す心を持ち続ける登山家としても認識していたことを、ひとまず確認しておくにとどめる。

次いで、「エミール・ジャヴェル」においては、これら二つの一見相反するような資質をジャヴェルというアルピニストが合わせ持っていることを、総合的に評価した記述が見られる。しかも、ジャヴェルに静観的な態度のみを見出そうとする一般的な見方は、それ自

体なんら誤りではないにしても、実はその奥に「一脈の純真にして強烈な登高心」が存在していることを忘れるべきではないと、明確に主張している。

斯くの如くジャヴェルは極く小範囲に自らの登山逍遥する山なり谿なりを限つて、其處に深い観照を見出した。此れは彼の登山者としての態度傾向の最も強き顕現である。ジャヴェルを語るとき、人は皆唯此の点を強調する。洵に強調しても可なりである。然し又同時に忘るべからざるは彼が決して唯に此れだけに止まらなかつたと云う事である。彼の生涯を蔽う登山者としての全姿は勿論静的のものであつた。乍併、彼の其の穏和謙遜な登山者的態度の中にも又一脈の純真にして強烈な登高心が存したのである。恐らく此れ無かりせば、彼は生涯ダン・デュ・ミディを幾度となく登り、サレーヴ Salève の山地を彷徨し、ヴァレエの谿々を逍遥して其處の山村の牧歌的風景を愛しんだに止まったであらう。然し彼はセルヴァン [マッターホルンのフランス語名]、ワイスホルン、ロートホルン、ダン・デラン、ポワント・ドルニイを登り、トゥール・ノワールを初登頂した。此等は一八七〇年代の當時に於ては假令順路より為すも第一流の登山であつたのである。<sup>11)</sup>

大島亮吉も、ジャヴェルが基本的には静観的な特徴を色濃く持った登山家であることを認めているし、本来大島は、ジャヴェルの詩的・瞑想的な面に多く共感したものと思われる。なぜなら、峠や高原の牧場を描くとき、行間からにじみ出るのは、そのような面でのジャヴェルの面影であり、尾崎喜八の描く高原の風景とほとんど重なっていくからだ。<sup>12)</sup>

それでは、ピーク・ハンターとしてのジャヴェルをことさらに力説するのはなぜか。大島亮吉が、いたずらに銜学趣味を振り回しているとは思えない。私見によるとその背景には、転換期を迎えて新たな方向性を模索していた日本の登山界固有の事情があると考えられる。この点について次章から考察していきたい。

## 第二章 日本の登山の二つの流れ

### 1. 日本古来の伝統的登山

日本は島国であると同時に山国でもあり、日本人の山との付き合いは長い。万葉の昔から富士山や筑波山をはじめ数多くの山が歌枕として歌われてきたし、宗教的にもすでに7世紀後半ぐらいから、役小角（7世紀後半～8世紀前半？）を開祖とする修験道という形で山岳宗教が盛んになっていた。782年の勝道上人による男体山登山の様子は、漢文体ながら

きわめて具体的に文章に表わされており、日本最初の登攀記とでもいうべきものである。富士登山もすでに9世紀後半には、都良香の「富士山記」という形で文献に残されている。ヨーロッパのアルピニズムが18世紀ごろにようやく成立したのに比べれば、日本ははるかに長い登山の歴史を有していると言える。

小林義正は明治中期にヨーロッパからアルピニズムが輸入される以前の日本の伝統的登山を、宗教的な登山・科学的な登山・軍事もしくは領地の保全を目的とした登山・文人墨客による趣味的登山の四つに分類している。<sup>13)</sup>

第一の宗教的な登山には、修験道のほかにも、諸山にまつわる開山登山——播隆上人による槍ヶ岳開山(1782年)等——や、江戸時代に盛んに行なわれた講中登山という一般大衆による団体登山——1570年に成立した富士講など——が含まれる。第二の科学的な登山とは、主として江戸時代の本草学者による植物採集を目的としたものであり、このような登山を実践した人物として、シーボルトが「東洋のリンネ」と賞賛し、主著の『花叢』がのちにフランス語にも訳された小野蘭山(1729～1810年)をはじめとして、植村政勝(1695～1777年、著書に『諸州採薬記抄録』)などが挙げられる。第三の軍事もしくは領土の保全を目的とした登山には、有名な佐々成正の針の木越え(1584年)などの他に、江戸時代の加賀、松本、尾張、高遠などの諸藩に設けられた山廻り役による登山が含まれる。特に飛騨山脈(北アルプス)の中心部を管理する加賀藩の黒部奥山廻り役(1640～1870年)は、登山技術を高める上で日本の登山史上重要な役割を演じたとされる。第四の文人墨客による趣味的登山の例としては、先に触れた都良香も含められるが、主としては江戸時代後期に活躍した橘南溪や十返舎一九、大淀三千風といった文人や谷文晁のような画家が挙げられる。

第一から第三分類までの登山は、山に登るという行為自体を目的としているわけではないので、近代的な意味での登山とは言えないかもしれないが、講中登山などは、宗教を口実にしながら、じつはレクリエーション意味合いの強いものであったし、山崎安治は『新稿 日本登山史』の中で、諸藩の山廻り役の登山に関して、「登山記を見ても、その記述、あるいは登山の態度はきわめて合理的であって、動植物、地理などにも深い関心をはらっており、その登山はかなりの域に達していたことがうかがわれる」<sup>14)</sup>と、いくばくかの近代性を認めている。本草学者の登山については、ヨーロッパにおいても、近代登山の黎明期には植物学者や水河学者が活躍したことを思えば、動機の不純をかこつ必要もないだろう。

拙論の趣旨から言えば、いわゆる「静観派」の源泉は、18世紀ごろから盛んになる第四分類の趣味的登山に求めることができる。これは文人墨客によって行なわれた旅の延長としての登山であり、学術色にも宗教色にも染まらず、山に登ることそれ自体を目的として、



登る過程そのものに喜びを見出す点で、近代登山の原型と言えるだろう。

文人墨客の趣味的登山は、明治に入ってからでも、文士による旅行登山という形で受け継がれ、諸国の名勝を探る旅の気風は一層の流行を見るようになる。明治の初期にあって、例えば高遠の旅行家高橋白山（1836～1904年）は『登白崩岳記』を著わし、富山の漢学者小杉復堂（1855～1928年）は『乗鞍御岳遊記』という著作を残している。大蔵省の役人でありながら1882年には富士山にも登り、『北陸遊記』をものした穴戸昌のような人物もいる。北村透谷がシェリーをはじめとするロマン派詩人の山岳観に影響を受けて『文学界』第一号（1893年）に「富嶽の詩神を思ふ」を発表した背景にも、1883年の富士山登山の体験があったことを忘れてはならないだろう。

このようにして、近代登山の精神が胎動を始めた後、明治も中期に入ると、志賀重昂（1863～1927年）の『日本風景論』やイギリス人宣教師ウォルター・ウェストン（1861～1940年）を起爆剤にして、小島烏水（1873～1948年）らを中心に、ヨーロッパを模した登山の気運が熟してゆくことになるが、西洋のアルピニズムとは無関係に、あるいは一線を描きながら、文士の旅行登山は独自の路線を歩んでいった。例えば、田山花袋は1896年の男体山登山をはじめ、妙義山（冬期）や白根山、浅間山、富士山と、精力的に山に登ったし、その他、幸田露伴や山田美妙も当時の文人登山家の名簿から外すことはできないだろう。さらに、酒と旅を愛する東洋的文人の典型である大町桂月は、全国の山々を巡り歩いて、ついには『日本山水紀行』を著わすに至ったが、彼などは、当世流行の「日本アルプス」という呼び方を嫌い、敢えて「日本高嶺」という呼称にこだわったりして、西洋的な登山の風潮に染まることを潔しとしなかった日本人登山家の最右翼に挙げることができる。また、東京の文人で、1900年には『山水美論』を著わした久保天随（1875～1934年）は、「旅行、とくに登山について」と題された『山水美論』の巻頭論文の中で、「旅行とは行楽的なものであって、越中の薬売りや近江の商人が仕事のためにするものとは別のものだ。登山も同じ。絶頂に立ったときの眺めを予想しながら一步一步あえぎ登る苦しさの中に登山の楽しみがある」<sup>15)</sup>といった主旨の、きわめて近代的な登山観を披露している。

主に明治の後期から大正時代にかけて活躍した木暮理太郎（1873～1944年）や田部重治（1884～1972年）などは、西洋式登山の影響を受けながらも――すでにヨーロッパアルピニズムや、英国山岳会を模して設立された日本山岳会と隔絶して山登りを実践することはかなり困難な状況にあった――、日本の伝統的登山の性格を色濃く受け継いだ登山家として数え上げられる。木暮にとって、富士講と御岳講の家に生まれ育ったことが、彼の登山観を形成する上で大きな役割を果たしたし、田部にいたっては、英文学者としてワーズワースを研究し、彼の自然観から多くのものを学んだが、山登りに関してはアルピニズムの風

潮を否定し、大自然への崇拜・畏敬の念に根差した「山旅」を提唱・実践している。この「山旅」の思想は、もちろん文人の旅行登山の系譜に連なるものであり、実際田部は、同郷の先達小杉復堂の影響を強く受けて山の世界に開眼した。

生まれつき体がそれほど丈夫でなかった田部重治は、自分自身の体験から、誰でもが容易に登れる低山登山を基礎づけ、名著『日本アルプスと秩父巡礼』（1919年。1929年には『山と溪谷』に改題）をはじめとする美しい文章によって多くの読者を魅了したが、このことが登山の一般大衆への普及に果たした役割は大きい。

田部重治は、のちに“霧の旅会”を中心とする「静観派」から始祖として崇められることになるが、今回問題にしている大島亮吉も、同じく田部重治を、自らの登山思想形成の上で、重要欠かすべからざる支柱として尊重した。

以上を簡単にまとめると、江戸時代後期に盛んになった文人墨客の趣味的登山が、田部重治という巨人を介して、大正から昭和の初期にかけて、大島亮吉の「静観的」登山と“霧の旅会”の「静観派」という二つの子孫を生んだということになる。

## 2. ヨーロッパ・アルピニズムの受容

前項で述べた伝統的登山とは別に、日本の近代登山史を語る上で、なんとしても欠かすことのできないのは、西洋伝来のアルピニズムである。アルピニズムを日本にもたらしたのは、イギリス人宣教師ウォルター・ウェストンであると言っても過言ではないだろう。ウェストン以前の日本が、アルピニズムの思想や実践とまったく没交渉であったという訳ではない。すでに初代イギリス公使ラザフォード・オールコックは、日英修好通称条約締結（1858年）後の1860年（万延元年）には富士山に登っているし、その他、相次いで日本へやってきた諸外国の外交官、学者、技術者たちが、開国後の日本各地で登山を行なっている<sup>16)</sup>——ちなみにこの時代は、ヨーロッパ・アルピニズムの黄金時代（1854～65年）と重なっている。世界初の登山団体であるアルパイン・クラブがイギリスで結成されたのが1857年、最後まで難攻不落を誇っていたアルプスの高峰マッターホルンがついにエドワード・ウィンパーによって初登頂を成し遂げられたのが1865年のことだ——。また、1872年、大阪造幣寮お雇いの化学兼冶金技師として招かれたイギリス人ウィリアム・ガウランドは、飛騨山脈を中心とする高山を跋涉し、日本の中部山岳地帯を“日本アルプス”と命名した。さらにイギリス公使館書記官アーネスト・サトウは、退役イギリス海軍士官A・G・S・ハウスとの共編で『中部および北方日本旅行者案内』を出版（1881年）したが、のちに『日本旅行者案内』と改題されたこの書物は、特に中部山岳地帯を訪れる外国人と山者にとっては必読の案内書となり、日本の登山の発展を側面から支えることになった。<sup>17)</sup>

したがって、ウェストン来日（1887 年）以前の日本が、ヨーロッパ・アルプスを舞台に育まれた近代登山の精神をまったく知らなかったわけではない。しかし、小島烏水を中心とした日本山岳会が設立にこぎつけたのは、志賀重昂の『日本風景論』という書物と、さらには W・ウェストンの存在を抜きにしては考えられない。

『日本風景論』は、特にその中の「登山の気風を興作すべし」という文章によって、日本国内に登山の風潮を盛り上げる大きな原動力となったが、この著作におおいに感化された一人に、横浜正金銀行員の小島烏水がいた。彼は 1902 年、知人の岡野金次郎とともに、勇躍槍ヶ岳の“探検登山”——播隆和尚による開山（1782 年）の事実も、ガウランド（1877 年）やウェストン（1892 年）がすでにこの山に登っていることも、当時の烏水には知るよしもなかった——に出かけ、相当な苦労の末に、なんとか登頂に成功する。ところがその後まもなく、まったく偶然に W・ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』（1896 年、ロンドンで出版）を発見し、自分たち以前にも槍ヶ岳に登った外国人がいることを知って、しかもその外国人が同じ横浜に住んでいるということでさらに驚き、早速面識を得るに及んだ。アルパイン・クラブのメンバーでもあったウェストンの熱心なすすめがなければ、そしてそれに応える小島烏水の情熱がなければ、日本山岳会が 1905 年という早い時期に創立の日の目を見ることはなかったかも知れない。それほどまでに小島烏水とウェストンとの出会いは、日本の登山界にとって幸福なる偶然であったと言えるだろう。

その後、西洋伝来のアルピニズムは、日本の登山の主流として確固たる地位を確立するが、その際、明治時代の西洋文化移入の一環として、アルピニズムは日本の伝統的登山から自らを峻別し、伝統的登山を徹底的に無視した——小島烏水は宗教的な登山を、登山として認めなかった——。厳密な意味で未登峰などあるはずもない日本の山を、すべて白紙に戻すことで、日本の探検登山は初めて成立可能になる。

それでは、日本の伝統的な登山とアルピニズムの登山において、決定的に異なっていたのは何か。それは、ラスキン流——19 世紀当時のイギリス山岳会（アルパイン・クラブ）の思想的支柱として、美学者ジョン・ラスキン（1819～1900 年）の山岳美論を無視することはできない。ラスキンは高山に登った経験がまったくないにもかかわらず、山岳の美を世に伝えた功績によって、1869 年にはアルパイン・クラブの会員にも選ばれている。日本山岳会も発足当初は「学術的で国際的な雰囲気漂わせた知的エリート集団」<sup>18)</sup>として、ラスキン美学の影響を強くこうむった——の目で山岳に美を見出す（「山々は自然の完全さをわれわれに示すために作られたかのように思える」ということに尽きるのではあるまいか。宮下敬三氏が指摘している<sup>19)</sup>通り、日本山岳会初期の岳人には、本場アルプスへの強烈な憧れが共通しており、スイス・アルプスの明るいイメージ——恐怖や迷信に打ち勝つ

ことによって誕生したヨーロッパ・アルピニズムの深層に流れている暗いイメージは、日本の近代登山とは無縁である——を日本アルプスにも見出そうと躍起になっている。日本の山の向こうに、ヨーロッパのアルプスを透かして見る、憧憬と飛躍への期待を込めた視線こそが、新参のアルピニズムを伝統的な登山から区別する重要な要素となっていた。

したがって、日本山岳会初期の探検登山において、ヨーロッパのアルピニズムから吸収したのは、もっぱら登山思想——他に何の目的もなしに山、しかも平地から見えないような奥まった山にまで登るという発想そのもの——や美意識——槍ヶ岳や穂高連峰のような火山でない山にも美を見出す——であり、装備自体は蓑笠草鞋といった旅装束が依然として主流であった。日本の山は全体に標高も低く、氷河もないので、ことさらに特別な登山技術も必要としない。それゆえ、精神はともかくとして、技術や装備の点では、伝統的登山もアルピニズムの登山も、さしたる違いはなかったと言える。

ヨーロッパ・アルプスに類似した山岳風景の発見と、その美の鑑賞を主眼とする日本山岳会初期の登山に大きな転機が訪れたのは、1921年の榎有恒によるアイガー東山稜初登頂だ。この、本場ヨーロッパ・アルプスにおける日本人として初めての快挙をきっかけとして、本格的にアルプス仕込の登山技術や装備——1865年から第一次大戦ごろまでの、いわゆるアルプス登山“銀の時代”に確立された登山靴、ピッケル、アイゼン、ザイル、スキーなどの装備と、それを駆使した登山方法——が導入され、日本でも冬期登山や岩壁登攀が行なわれるようになる。

小論で注目した大島亮吉は、榎有恒の慶応大学における後輩であり、先輩の刺激を受けて、1924年には、慶応大パーティーの主力メンバーとして、奥穂高岳・北穂高岳のスキー初登攀に成功するなど、新しいスタイルを貪欲に吸収しながら尖鋭的な登山に打ち込んだ。このような日本の登山界の大きな転換期にあたって、先進的なアルピニズムの受容を主調としながらも、一方では、ある種保守反動的——田部重治の山旅を受け継ぐという意味において——で、かつまた開明的——西洋の登山思想にも敏感——な“霧の旅会”を原動力とする登山の大衆化が進み、「静観派」が一大勢力を形成する。こういった状況下で大島亮吉の「静観的」登山の主張が登場したという点に留意しながら、次章では、「静観的」という言葉の内容を深く掘り下げて考察していきたい。

### 第三章 「静観派」と「静観的」登山のズレ

#### 1. 「静観派」の基本思想

大正から昭和の初期にかけて、一般大衆、とりわけ、学生と違って長期の山行を実践す

ることの難しい社会人の登山者たちの間で力を得てゆく「静観派」は、低山を静観的な気分で逍遙する、内省的かつ、時としては宗教的傾向を帯びることもある登山態度を旨とする。これは、登山を純粹にスポーツとして発達させてきた西洋と違って、山登りという行為の中にある種の精神性を見出そうとする傾向の強い日本人の登山の特徴をよく現わすスタイルだとも言えるだろう。その意味で、「静観派」の登山は、単に山登りだけにとどまる問題ではなく、日本人の山との接し方の基層に横たわる感情にも関わってくるものである。が、ここでは論点を絞って、登山史的な関連にのみ焦点を当てると、「静観派」は、遠くは日本の伝統的な登山スタイルの中でも、文人墨客の趣味的な登山に最も多く由来し、近くは瞑想を通して山岳的自然と深く親しみ、融和することを目指す田部重治の「山旅」の思想を直接の源泉とする。田部自身は「山旅」という表現を用いる理由を次のように説明している。

山旅という言葉は、日本の登山を表わすに好適な表現だと、私は前から信じている。ヒマラヤやアルプスの登山を山旅と称することは、決して適切な表現とは思われない。しかし日本に於ては、登山の旅は、単に山頂だけでなく、峠、高原、山湖、溪谷、森林、時には山村などをも対象とする、山岳地方の旅を含み、且つこれ等のものは、山頂に劣らず、それぞれ独立の価値をもって、登山者を誘引する魅力を持っているので、山頂およびこれ等一切のものを含む登山の旅を、山旅という言葉をもって表現することは極めて適切であると思う。<sup>20)</sup>

いたずらに、山頂にこだわることなく、山という全体を構成するさまざまな要素に独自の価値を見出そうとする彼の主張は、ともすれば蔑称的な響きを込められがちな「静観派」にとって、心強い味方となったことは言うまでもない。また田部は、低山徘徊を賞揚し、登山に静観性を伴うことの重要性を次のようにも書き表している。

山岳は絶えず自らを超越しようとする努力の、また、闘いの気分の象徴でありとすれば、高原はそれを、一步、静観的ならしめると共に、人間世界のじめじめした実際界を想像の世界に引き上げて、最も瞑想的な気分を創造する気分のそれである。或る意味に於て、高原は現実と理想とのもっとも調和を見出しうる現実世界の緑地である。(……)登山の価値は必ずしも肉体的な闘いや動くことにのみ存するのではない。若し高原に於て登山に於けると同じ歓喜を体験し、同じく無我の境地に入ることが出来れば、そこにはその内容的価値に於て、何等の上下はないわけである。<sup>21)</sup>

ワーズワースのように「自然の個性をあくまで認め、そうすることに自己との融合を歌う静かに奥まってゆく態度を喜ぶようになった」田部重治は、山のすべてに神秘的な力を感じ、「私は山に一は宗教を見出しつつあるものである」<sup>22)</sup>とまで宣言する。

これは、『日本アルプスと秩父巡礼』（北星社、1919年6月8日刊）の出版を翌日にひかえた田部重治が、慶応義塾大学で行なった「山は如何に私に影響しつつあるか」という講演の結びの言葉だが、その時の聴衆の一人に大島亮吉がいた。彼は田部重治の講演に深い感銘を受けたようだ。大島亮吉は慶応義塾山岳会の会誌『登高行第五年』（1924年）の編集者として、田部の「山は如何に私に影響しつつあるか」を掲載しているが、安川茂男氏によると、そもそも『登高行第五年』は「この時代の本邦登山界における第一線的な内容」<sup>23)</sup>であり、大島はそこに翻訳まで含めると8篇以上の作品を投稿するほど情熱を傾けたわけだが、執筆者の中で唯一の部外者が田部重治であり、しかもこの講演録は年報第一年（1919年）に掲載されたものの再録である。この事実から見ても、大島亮吉の田部に対する傾倒のほどをうかがい知ることができる。

さらに安川は、次のような興味深いコメントを残している。「当時彼らの山岳会を一個の精神学会だと称している点などから見て、登山は極めて思索性、精神性を濃厚に富んだ（ママ）行為として見られていたことは疑いない事実であろう。」<sup>24)</sup>ヨーロッパ・アルピニズムのいわば輸入元であった慶応義塾山岳会にして、このような状況にあったということは、その他の一般的な傾向については言うに及ばないだろう。この精神性の源泉は、もちろん日本の伝統的登山に求めるべきであり、日本山学会成立以降も、伝統的登山態度が底流として、依然大きな力を保ち続けていたことを示している。尖鋭的な登山家としてアルピニズムの思想や技術を吸収・咀嚼に努めていた大島亮吉も、その一方で田部重治に傾倒し、おそらくはそのひそみに習って、「山岳宗」を自称したりしている。<sup>25)</sup>大島がその晩年に修験道の研究にあたらうとしていたことは、きわめて示唆的だ。

## 2. 「静観的」登山の思想

大島亮吉は「静観的」登山の思想を形成するにあたって、板倉勝宣<sup>26)</sup>の「登山法についての希望」と題された小文における、「静的」登山と「動的」登山の対比に着想を得ている。板倉の説くところを、かいつまんで引用してみよう。まず彼は、次のような時代認識から始めている。「平地に波乱を起こすような登山冒険談の時代は過ぎ去った。各人の個性にふさわしい山の味わい方が内面的にのみか、外観的にも分れてくるべき時がきたのではないか。」次いで、日本人の伝統的な登山の特徴に言及する。「われらの多くは、東洋人として山を静的に、あるいは、直感的に味わう傾向を多分に有しているように思われる。」その後

で、当時の日本の登山に欠けていたものを補う方向で、確固とした方法論を持ちながら新しいアルピニズムのスタイルを取り入れてゆくべきだとの提言がなされている。「ここにおいて、動的な山の味わい方、すなわちロッククライミングとスノウクラフトとが現れてくるべきではなかろうか。」<sup>27)</sup>

板倉の言う「登山冒険談の時代」とは日本山岳会成立以降、日本のめばしい山々に短長ささまざまな尾根ルートが切り開かれていった、いわゆる探検登山の時代を指す。確かな技術や方法論に裏づけされたわけでもない、神風的な特攻登山――小島烏水の槍ヶ岳登山がまさにその典型だった――が壮挙、快挙ともてはやされる風潮を、若干揶揄しての表現だ。そして板倉は、「山を人生にとり入れ、あるいは人生を山にとけあわせて、山なしには生きられない人間になってゆく」――田部重治にとっての山がまさにその通りであった――という成りゆきを、日本人にとってはごく自然で、一般的な傾向としてとらえている。しかし、人間の性質は決して一様ではない。自分本来の道を追求した結果、静的な登山からはずれて動的な登山へと向かう場合もありうるとして、岩および雪の山に対する研究が盛んになることを、板倉は希望しているのだ。

大島亮吉は、立山で凍死した岳友をしのび、静的登山から動的登山へという彼の発想を自分なりに発展させて、「山への想片」に結実させた。しかし、「ピークハンティングより静観的な態度へ」<sup>28)</sup>という「山への想片」を貫く基本主題は、一見、板倉の主張と正反対のように思える。

大島の時代認識はこうだ。ヨーロッパ・アルプスにおいては、すでに黄金時代が終わりを告げ、銀の時代へと移っていった。登山方法も、英国山岳会がリードしてきた一般ルートによる夏期登山の枠から外れて、アルプスを擁する地元登山家の台頭による、岩登りを用いたバリエーションルートやスキーによる冬期登山といった、新たな道が開拓されつつある。その最右翼が、銀の時代の代名詞とも言えるA・F・ママリーであった。板倉が「動的」登山としてとらえたこの新しい波を、西洋の山岳文学にも造形の深い大島は、豊富な読書体験から、登山の内面的な深化と連動させてとらえようとする。ピークハンティングは、外面的な、文字通りの行為（黄金時代）から、常に困難で新しい登攀を求める心の中のピークハンティングに置き換わった（銀の時代）と、大島は看破したのだ。銀の時代の新しい登山スタイルは、ピークハンティングの内面化を推し進めた。そのピークハンティングの心を胸に抱いて絶えずより高きを、より困難を目指し、「山々との激しい闘争に限りない悦びを感じ得た」まことの登山者の代表として、大島亮吉はジャヴェルとママリーを推す。

そもそもこのピークハンティングということについて所言をなした登山家の一人で、有名な人はフランス生れのエミール・ジャヴェル（一八四七～一八八三）であろうと思います。（……）さてかれジャヴェルがその著のうちにて言いたる、彼のピークハンティングに対する考想をみますに、「（……）征服といえ、それは自らの心に聳ゆる山の未知の危険に対する恐怖やそれを登る困難に対する労苦を征服し、耐え忍んだものである。勝利といえ、それは自らに対しての勝利であって、山に対する勝利でもなければ、他の登山者に対する勝利でもない。深くして、抗し難き本能によって私ら人間は絶えず身を引き上げ、登りゆくことを愛す。それ故、峰が高ければ高いほど、より眩暈を起こさしめるほど急峻なればなるほど、そしてそれがより困難なればなるほど、その峰は登山者の永久に到達し得ぬ理想に近づいてくるのである。（……）」と言っております。すなわちピークハンティングの心は登山者にとっては離すべからざるものであることをジャヴェルは言っているのですが、これを一層高調して。「絶えず新しき登攀を求めつつある人のみが、まことの登山者である」というように強く言った登山家は、有名なるかのマンメリイ（一八五五～一八九五）であります。<sup>29)</sup>

このようなピークハンティングの内面化にともなって、もう一つの顕著な傾向が現れる。それが大島の言う「静観的」な態度だ。

マンメリイが持っていた、あのような心は正しく、まことのピークハンターの心でありましょう。その心を享けついたらこそ、また今日の静観的な登山法も生じたのだと私は思います。今日の登山者はやはりピークハンターの心を持っておりますが、彼らはもう種々なる条件のために外面的にピークハンターとはなり得ないので、ついに今度は内面的に、各々の登山者が心のうちに聳えている、未知未踏の山を、新たに登りはじめたのであります。<sup>30)</sup>

その「静観的な」登山法について、簡潔な定義には至らないまでも、大島亮吉はいろいろと説明を試みる。その一端を繙いてみよう。

最初まず山に登ることの愛についてみるに、私はこれをアクチーブは徳と呼ぶのが正しいと思う。ある人はそれはひとつの思索であると言うが、それは非である。何故かと言えば、山に登るにはただ思索冥想をもってなすことができないからではあるが、しかしてまた決して登山者の態度は全然能動的なもの、すなわち身体的な単なる運動ではな



く、その一部分は思索であり、瞑想の境地であらねばならぬと、私は思うのである。<sup>31)</sup>

このような「静観的」な傾向を明確に示している登山家として、大島はヨーロッパの何人かの登山家を列挙している。すなわち、ヘーク、マイエル、モルゲントーレル、ロッセル、ゴオ、ヤングといった人々だ。

板倉勝宣の「動的」登山のすすめから出発した大島亮吉は、豊富な例証にもとづいて、「わが国においてはこの外面的においてのみならず、内面的な方向においてさえも十分に前途の展開は得られるものではないかと思います」<sup>32)</sup>との認識に至る。これから十分発展の余地がある「内面的な方向」とは、この、田部重治に代表される、日本の伝統的な登山態度——板倉の言う「静的」登山——と異なるものであることは明らかだ。なぜなら、「静的」登山は、日本においては一般的な登山態度であり、かつ、すでに十分深化発展を経てきたものだからである。大島亮吉が見すえていたのは、その単なる延長ではない。「外面的」すなわち進化したアルピニズムの思想や技術を貪欲に吸収しながら、「内面的」すなわち日本の伝統的な登山態度が培ってきた深い精神性と融合させること、つまり彼我の長所をつなぎ合わせた新しい登山スタイルの創出に、豊かな可能性を見出していたのである。

そして、大島亮吉は、次のような結論で締めくくる。

それならば、私ら山に登るものはいかにして山に登るべきであるかと申しますに、それはあくまで山と闘う気持ちですすんでゆくピークハンターの心と、静かに内面的に深みを求める、すなわち静観的な態度とを深く交えて、ただ一途に山を登ってゆけばよいのであると私は教えらるるように思います。<sup>33)</sup>

すなわち、戦闘的ママリズムにおける内面的なピークハンティング——行動の面では、岩壁登攀や冬期登攀として表れる——と、思索・瞑想に重きを置く「静観的な態度」とをあわせもつような登山を模索すべきだという主張である。この、大島の理想とする登山態度には、結局適当な名前が付けられていない。それを「静観的」という一言でまとめたのは、大島の思想を受け継いだ伊藤秀五郎だ。

静観的といふのは、山登りに於ける激しい身体的な行動と、危険を含んだ肉体的な緊張感のみを享楽するに止まらずして、そのような行為をも含めて、より豊かな心を以て自然を観照しようとする態度である。<sup>34)</sup>

大島において「山と闘う気持ちですすんでゆくピークハンターの心」と「静観的な態度」という一組の表現でまとめられていたものが、伊藤においては「激しい身体的な行動と、危険を含んだ肉体的な緊張感」と「豊かな心を以て自然を観照しようとする態度」に置き換えられたうえで、両者を総合して「静観的」という名が冠せられている。

本論文で一貫して「静観的登山」と呼んできた登山思想は、厳密には、大島が模索し、伊藤が「静観的」と名付けた、この考え方を指しているということを、ここで改めて確認しておく。

### 結びにかえて 新しい登山哲学の創出

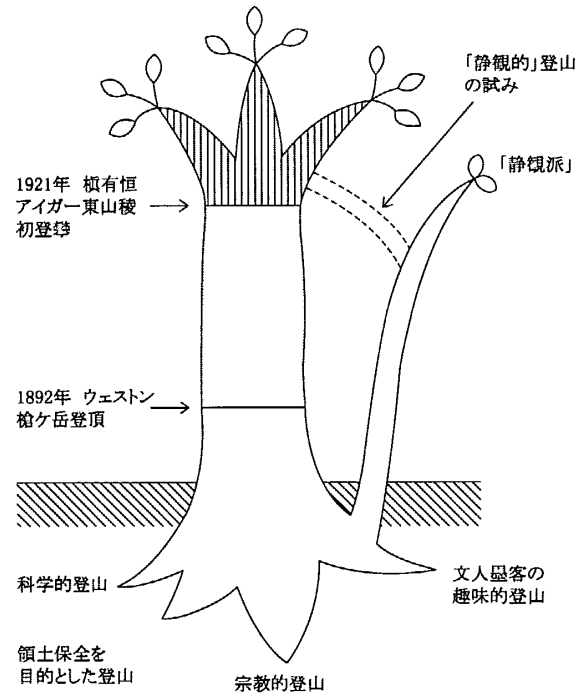
ここで再度、「エミール・ジャヴェル」の中で大島亮吉が描いたジャヴェル像を振り返ってみよう。曰く、ジャヴェルは「静的な登山態度」を主調としながらも、「一脈の純真にして強烈な登高心」を内に秘めた登山家であった。おそらくこのようなとらえ方は、ジャヴェルの登山には登攀（grimperie）と逍遙（flânerie）の二面があるとするエドワール・ギュイヨンの評価<sup>35)</sup>を受け入れてのものであるが、一般には「静的」なものとされる登山態度に、「一脈の純真にして強烈な登高心」を敢えて強調することによって創出されたジャヴェル像は、大島亮吉の模索した「静観的」登山のありかたそのものを示していることがわかる。大島の作り出したジャヴェル像は、彼が理想とする登山のあり方を体現したものであり、もっと言えば、「山への想片」においてはまだ十分彫琢しきれていなかった彼の登山哲学が、3年の月日を経て成熟・深化していく過程で、ジャヴェルに対する評価にも変化が生じ、若干理想化されたものと言えるのではないだろうか。

大島亮吉の時代は、一方で日本山岳会草創期の探検登山がゆきずまりを見せ、他方で、積雪期登山、バリエーション・ルート、岩登りといった新しい登山スタイルが台頭してきた時期にあたっている——同時に、学生山岳部の創出、社会人による低山発見の時代でもある——。急進派に対して、「単なるスポーツ登山（遊戯的登山）に終始していいのか」という批判がなされるのは当然だろう。現に二、三十年以前にはママリーが、アルパイン・クラブからの同じ批判の矢面に立たされている。そこで大島亮吉は、行為の面では戦闘的なママリズム（深化したアルピニズム）を取り入れながら、それを内面においては伝統的な「静観派」の観照性によって裏づけるという新しい登山哲学を模索した。その結果、観想的なジャヴェルにピークハンティングの心を求め、行動的色彩の強い「静観的登山」の思想を生み出すに至ったのではないだろうか。

注

- 1) 伊藤秀五郎(1905～76年)：北海道大学山岳部員として、北海道登山が黎明期から爛熟期へと移行する時代に活躍し、多くの先駆的の山行を行なう。代表作『北の山』(梓書房、1935年)には、北海道の登山紀行とともに、詩的・哲学的精神に満ちた小論や随筆が収められているが、その基調となる「静観的」登山観には、田部重治や大島亮吉の影響が色濃くうかがえる。
- 2) A・F・ママリー(1855～95年)：イギリス人登山家。近代アルピニズムもしくはロック・クライミングの開祖であり、アルピニズム「銀の時代」(1865～1914年)を代表する人物。1891年からは、当時物議をかもしたガイド・レス登山を実践する。登山を純然たるスポーツと見なし、修練によって得る技術と困難に立ち向かう闘志こそ登山の真髄と信じ、これを極限まで追求しようと試みた最初のアルピニスト。「より高きを、より困難を」という彼の思想はママリズムと呼ばれ、最初異端視されたこともあったが、後年多くの信奉者を得て、近代アルピニズムの主流となる。1895年、ナンガ・パルバットで消息を断つ。遺著に『アルプス・コーカサス登攀記』(1895年)。
- 3) 『山岳図書展覧会目録』(1935年) 15 ページ。
- 4) 島田巽『山・人・本』(茗溪堂、1985年) 293 ページ。(『山岳』、1939年9月号初出)
- 5) E・ジャヴェル『一登山家の思い出』(角川文庫、1952年) 274 ページ。(あとがき「アルプスのオルフォイス」)
- 6) 同書、275 ページ。
- 7) 日本山岳会『会報』第70号(1937年11月)、T・K氏「図書紹介」より。
- 8) 『大島亮吉全集』(あかね書房、1969～70年) 第二巻、150 ページ。
- 9) 同書、136 ページ。
- 10) 大島亮吉『山——随想——』(中公文庫、1978年) 117～8 ページ。なお、『山——随想——』は、朋文社版『山 随想』(1958年)と同一の内容である。
- 11) 大島亮吉『先蹤者』(大修館書店《新編復刻日本の山岳名著》、1978年) 395～6 ページ。
- 12) 大島亮吉の「荒船と神津牧場附近——中部日本の低い山あるきのひとつとして——」(『山 研究と随想』所収)には、尾崎喜八の詩集『高層雲の下』(1924年)に収められた「野の搾乳場」からの盗用がある。このこと自体、両者が高原に対する感受性に関して、共通するものを多分に持ち合わせていたことを如実に示していると言えるのではないだろうか。
- 13) 小林義正『続 山と書物』(築地書館、1963年) 226 ページ。
- 14) 山崎安治『新稿 日本登山史』(白水社、1986年) 93 ページ。
- 15) 久保天随『山水美論』(新声社、1900年)より(山崎安治、前掲書、253 ページ参照)。
- 16) 山崎安治、前掲書、190 ページ参照。
- 17) 同書、201 ページ参照。
- 18) 宮下啓三『日本アルプス』(みすず書房、1997年) 20 ページ。
- 19) 同書、50 ページ以下参照。
- 20) 田部重治『わが山旅五十年』(平凡社、1996年) 17～8 ページ。(初版桃源社、1964年)
- 21) 田部重治「高原」1931年5月(三田博雄『山の思想史』(岩波新書、1973年) 116～7 ページ参照)。
- 22) 『山と溪谷』(岩波文庫、1993年) 33 ページ。
- 23) 『大島亮吉全集』第一巻、336 ページ。
- 24) 同書、333 ページ。
- 25) 『大島亮吉全集』第一巻、111 ページ。(「関温泉スキー講習日記」)

- 26) 板倉勝宣(1897～1923 年)：北海道大学在学中，スキーと登山に情熱を傾けた新進気鋭の登山家で，大島亮吉とも交友があった。関東大震災のあった 1923 年，立山で猛吹雪により遭難。「登山法についての希望」は，遺稿集『山と雪の日記』（梓書房，1930 年）に収められている。
- 27) 板倉勝宣『山と雪の日記』（中公文庫，1977 年）112～2 ページ。
- 28) 大島亮吉『山——随想——』111 ページ。
- 29) 同書 116～8 ページ。
- 30) 同書 136 ページ。
- 31) 同書 121 ページ。
- 32) 同書 137 ページ。
- 33) 同前。
- 34) 伊藤秀五郎『北の山』（大修館書店《復刻日本の山岳名著》，1970 年）127 ページ。
- 35) 大島亮吉『先蹤者』396 ページ参照。
- 36) 参考までに，日本における登山の流れを一本の木に模して図式的に示してみた。時代は下から上へと下ってゆく。地面の下は江戸時代以前，地上部は明治時代以降を指すものとする。日本で独自に成立・発展した伝統的登山は，四つの主要な根を持つ。1890 年代からヨーロッパ・アルピニズムの刺激を受け，探検登山が始まる。技術や装備の面で本格的にアルピニズムの受容が始まったのは 1920 年代から。アルピニズムはあくまで伝統的登山という台木の上に接ぎ木されたものだが，間もなくアルピニズムが主流となり，文人墨客の趣味的登山に端を発する「静観派」は傍流もしくは底流に甘んじることになる——しかし現在においてもなお，「静観派」的な要素を無視しては，日本の登山を語ることはできないだろう——。図中の枝葉の数に意味はない。大島亮吉の「静観的」登山は，主流のアルピニズムと傍流の「静観派」を融合しようとする試みであった。



【付記】本稿は，1998 年 5 月 9 日に名古屋大学で行われた日仏山岳文化研究会における口頭発表をもとにして作成したものである。